自己関連手がかり語は抑うつ傾向者の自伝的記憶検索時のマインドワンダリングを誘発する

○松本 昇¹²・菅原大地¹・望月 聡³

(¹筑波大学大学院人間総合科学研究科・²日本学術振興会特別研究員・³筑波大学人間系)

キーワード: 自伝的記憶の具体性の減少, マインドワンダリング, 抑うつ

The self-relevant cue induce mindwandering in dysphoria during autobiographical memory retrieval

Noboru MATSUMOTO¹², Daichi SUGAWARA¹ and Satoshi MOCHIZUKI³

(¹Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, ²Research Fellow of Japan Society for the Promotion of Science, ³Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba)

Key Words: Reduced autobiographical memory specificity, Mindwandering, Depression

目 的

抑うつ者や抑うつ傾向者には、自伝的記憶の具体性の減少(reduced autobiographical memory specificity: rAMS)がみられ、rAMSは抑うつが悪化する脆弱要因であることが明らかとなっている。rAMSの原因のひとつとして、抑うつ者や抑うつ罹患歴のある者は検索時に自己関連表象の活性化や反すう思考が生じやすく、それに捕らわれて検索が進まなくなることが挙げられている(Williams et al., 2007)。さらに、Matsumoto & Mochizuki (2014)は、非臨床群の抑うつ傾向者においても、ポジティブな自己関連手がかり語を提示された際にrAMSが生じることを示している。

これらの捕らわれに関する研究では、自己関連手がかり語が検索時の自己関連表象の活性化を引き起こすという仮定の下、自己関連性の高い手がかり語を提示された際に抑うつ者にrAMSが生じるかどうかの検討がなされてきた。ただし、先行研究では手がかり語の自己関連性を操作するのみであり、検索時に自己関連表象への捕らわれ(capture)が生じているのか、もしくは検索以前の符号化や保持過程において特異的な処理がなされているのかは不明確であった。

そこで、本研究では、抑うつ傾向者に特異的な捕らわれが自伝的記憶の検索時に本当に生じているのかについて、マインドワンダリング研究の手続きを援用して直接的に検討した。通常の自伝的記憶想起課題を実施中に、制限時間内に記憶の検索ができなかった場合の状態を思考サンプリング法によって収集し、課題外のことを考えていた比率を自己関連表象の活性化および反すう思考の指標として扱った。

方 法

実験参加者 大学生39名(女性25名, 平均20.18±1.22歳)
AMT (Autobiographical Memory Test: 松本・望月, 2013; Williams & Broadbent, 1986) AMTはOGMおよびrAMSを測定するための自伝的記憶想起課題である。参加者は手がかり語(例: 平和な)を与えられ、関連する記憶を30秒の間に思い出して報告し始めることを求められた。本研究では、“具体的なエピソードが良いがあいまいでも構わない”とする任意の指示法(AMT-OI)を実施した。手がかり語としてポジティブ5語とネガティブ5語を用いた。実験終了後、実験実施者および独立した評定者によって、具体的な記憶、カテゴリー化記憶、拡張記憶、意味連想、省略、その他に分類が行われた。また、課題中のマインドワンダリングを測定するために、30秒間何も思い出せなかった場合、“何を考えていましたか?”という質問が提示され、(a)課題に集中していた、(b)課題無関連な内的な思考や感情、(c)課題無関連な外的な刺激、(d)何も考えることができなかった、の中から回答を求めた。全試行のうち、“課題に集中していた”以外の回答をした比率をマインドワンダリングの指標とした。

自己関連性質問紙 AMTで使用した各手がかり語がどの程度、自己にあてはまるかを7件法で訊ねた。

日本語版 BDI-II (小嶋・古川, 2003) 抑うつ症状を測定するための質問紙で、全21項目で構成される。

手続き 言語流暢性課題, SART, AMT, 自己関連性質問紙, BDI-II, RRS, CBASをこの順番で行った。なお、言語流暢性課題, SART, RRS, CBASについては本発表では言及しない。

結 果

手がかり語の自己関連性がマインドワンダリングに及ぼす影響 AMT中のマインドワンダリング率を従属変数としたマルチレベル分析を行った。レベル2の変数として各参加者を投入し、レベル1の変数として感情価(ポジ/ネガ)、自己関連性、抑うつ得点(BDI-II)を投入した。分析の結果、感情価×自己関連性の交互作用が有意となり($\gamma = -0.06$, $p < .01$)、自己関連性×抑うつ得点の交互作用が有意傾向となった($\gamma = -0.06$, $p = .066$)。そこで、単純傾斜の有意性検定を行ったところ、自己関連性の高い手がかり語では抑うつ得点が増加するとマインドワンダリングが有意に増加しており(Figure 1)、ネガティブ手がかり語では自己関連性が増加するにつれてマインドワンダリングが有意に増加していた。

手がかり語の自己関連性がrAMSに及ぼす影響 AMTで測定されたrAMSを従属変数とし、上記と同様のデザインでマルチレベル分析を行ったが、有意な結果は得られなかった。

Figure 1. Simple slopes for self-relevance one standard deviation above and below the mean BDI-II (depression)

考 察

抑うつ傾向者は自己関連性の高い手がかり語を与えられた際にマインドワンダリングが増加することが示された。これはWilliams et al. (2007)の捕らわれ仮説を支持する結果である。ただし、本研究では抑うつ傾向者にrAMSがみられなかった。したがって、抑うつ傾向者は自己関連刺激に対してマインドワンダリングがみられやすいが、それによってrAMSを引き起こすとはいえない。本研究のデザイン上、マインドワンダリングがrAMSに及ぼす影響は検討できなかった。よって、自己関連刺激とrAMSをマインドワンダリングが媒介するモデルを直接的に検討することが今後の課題であろう。